

塾主インタビュー

凄まじい青経塾エネルギー

「魂」

混迷の時代から新たな光を掴め！

30周年記念行事「講演部グランプリ大会」「えんためばんばん祭」を終えた今、遠山塾主にお話を伺った。

「石の上にも3年」

3年間やり続けなければ本物にならないという遠山塾主。3年は一つの節目であり、3年間で卒業を迎える青経塾現役生活もその法則に従っていると。

青経塾はただ3年、3年、を積み重ねて30年を迎えたわけではない。成長を重ねた塾生が更に同じ価値観を持つ仲間を乗数的に集めることによって、千人体制を作り出した。一人だけで考えたなら、能力は知れたものだが、集団の中で考えることによって能力の限界を大きくすることができる。

今回吹上ホールを貸し切って、青経塾生が自主運営で行なった「えんためばんばん祭」というイベントに四万五千人もの人が集まった。この成功は、青経塾という組織が社会に認められた証であるという塾主。豊かな時代になればなるほど、不平不満が多くなる。人々は何か満足できないでいる。そういった時代に相手の必要とするものを創造し、供給することができたから、吹上ホールでの成功につながった。これは塾生全員が何らかの形で30周年の意味を理解していたからに他ならない。



また、30周年講演会部門において、70余りのグループが各人の知恵を出し合って事業として成り立つ程のアイデアを生み出すことができた。新しい塾生がまず考え、行動することによって先輩塾生をも活性化させた。青経塾30年のエネルギーはまさしく今求められる組織のあり方を形成した。言葉では言い表せない深みが青経塾の根源「魂」だ。

混迷の時代を乗り切るには、すさまじいまでのエネルギーをトップが持ち続け、組織に伝播し、その時代にあった顧客のニーズを的確に捉え、創造し続けることではないか。今、「普通」ではダメであることを、えんためばんばん祭で証明した。

「リーダーは謙虚になれ。お客さんでなく、奉仕する側に立て」という塾主。塾生1人1人が謙虚な姿で取り組む限り、青経塾は永遠に続くのだと。

<第29塾 牧野仁一>

